

広島大学学術情報リポジトリ

Hiroshima University Institutional Repository

Title	学位（博士）論文の報告
Author(s)	又野, 陽子
Citation	LRT研究紀要 , 5 : 2 - 6
Issue Date	2017-03
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00053068
Right	This is not the published version. Please cite only the published version. この論文は出版社版ではありません。引用の際には出版社版をご確認、ご利用ください。
Relation	



学位（博士）論文の報告

又野 陽子

1. はじめに

平成元年に山口県の公立学校教員に採用されて6年が経過した頃、山口大学大学院教育学研究科（修士課程）へ派遣（研修）という機会をいただき、談話分析に基づく教室内コミュニケーションのモデルに関する研究を進めた。修士課程修了後も、中学校の教壇に立ちながら、各種学会、すなわち、全国英語教育学会、中国地区英語教育学会、山口大学英語教育研究会等で論文を発表しながら研究を継続していった。そうした中で、さらに専門性を高め研究を深めていきたいという思いから、平成15年4月、広島大学大学院教育学研究科文化教育開発専攻博士課程後期に進学した。所定の単位を修得し学位論文の審査及び最終試験に合格し、平成18年3月、広島大学より博士（教育学）の学位を授与された。公表の方法として、広島の溪水社から500部自費出版した¹。広島大学附属中央図書館、山口大学附属図書館、山口県立山口図書館、山口市立中央図書館等にも寄贈させていただいた。このたび、本稿において学位（博士）論文の報告²の機会を与えていただいたので、研究成果が日々の授業や教材の編纂、タスクの開発等、さまざまな場面で参考資料となれば幸いである。

2. 論文要旨

論文題目 A Study on the Acquisition of English Function-chains:
A Focus on Japanese EFL Learners

第1章 序論

中学校学習指導要領（平成10年12月）において「言語の使用場面」と「言語の働き」という概念が導入され、実践的なコミュニケーションの枠組が示された。指導に当たっては、コミュニケーションを図る活動においては、具体的な場面や状況に合った適切な表現を自ら考えて言語活動ができるように配慮することが述べられている。伝統的な英語教育においては、教授や評価の際に構造能力を中心ととらえてきたが、その後のコミュニケーション重視の英語教育の動きにおいては、実際のコミュニケーションを目的として適切に英語を運用することができる力の重要性が認識されるようになった。コミュニケーションにおける言語使用に関する研究である語用論研究は、言語行為や会話のやりとりの構造なども広く研究対象としている。言語行為論は外国語教育においては言語機能（function）を中心としたシラバスの作成に不可欠の基礎研究となるものであるが、Cook (1991) は談話構造の中で言語機能をとらえる必要性を述べている。また、McCarthy (1991) は一続きの機能、例えば質問－回答の連鎖を機能連鎖（function-chain）と称し、会話の構造という視点を学習に取り入れることを提案している。以上のような背景から、

日本人英語学習者が適切性を判断する力を発達させていく道筋を機能連鎖という視点で横断的に探り、適切な言語使用とその習得プロセスに関する基礎的情報を得ることを研究目的とした。

第2章 文献研究

まず、歴史的視点からこれまでの第二言語語用論能力研究の文献研究を行った。中間言語語用論能力に関する研究の多くは母語話者と第二言語学習者との言語使用を比較した異文化対照語用論研究であったこと、第二言語熟達度を変数とした横断的研究において語用論能力の発達に熟達度の影響があまり見られなかった研究には被調査者に真の初級者が含まれていないことによる可能性があることを指摘した。また、複数の機能連鎖を取り上げることによる各機能連鎖ごとの被調査者の反応態度の比較や機能連鎖間の構造と学習者の関連についての調査の可能性を指摘した。

社会言語学的視点からは、適切性を決定する要因について Finocchiaro and Brumfit (1983) から示唆を得た。また、本研究における機能の分類やテスト項目の作成の際に Blundell, Higgens, and Middlemiss (1982) を参照した。こうした文献研究を受けて、本研究では、英語の初級学習者を研究対象に含め、複数の機能連鎖を取り上げて、英語の機能連鎖にみる適切性の習得プロセスを調査することとした。本研究の研究計画の構成要素は以下の2点にまとめられる。

- 1) 機能連鎖の構造と適切性の判断との関連 (調査1)
- 2) 英語の熟達度と適切性の判断との関連 (調査2、調査3)

第3章 調査1 機能連鎖の構造の適切性についての中学生の認識

調査1では、英語の教科書の中の対話40と自然談話の中から抽出した対話30をテスト項目として機能連鎖の構造や中学生の選択とそれらの関連について分析することを目的として中学3年生69名を被調査者としてテストを行った。話者Aから話者Bへの発話の言語機能のつながりかたが適切であるか否かといった脈絡的適切性について判断するというテスト内容であった。問題AからSで表される機能連鎖の特徴を推定することを目的として因子分析を行い、因子負荷量をもとに因子の解釈を試みた。また、問題AからSで表される各機能連鎖合計70について各被調査者ごとに適切性が正しく判断された場合に1、あやまった判断に0をあてはめ林の数量化Ⅲを適用して2つの相関軸（I次元とII次元）を求めた。それぞれの相関軸に高い成分値をとる各機能連鎖の特徴からI次元とII次元の軸の特徴を解釈した。I次元をX軸上に、II次元をY軸上に70項目を表した結果、自然談話から抽出した機能連鎖に関しては成分値の散らばりが大きく中学生の判断においていろいろなパターンや要素が絡まっているということがわかった。一方、教科書から抽出した機能連鎖に関しては相対的に成分値の散らばりが少なく中学生が皆同じような判断をし共通する反応をしていた。このことから自然談話に観察される機能連鎖と教科書に見られる機能連鎖とでは被調査者の反応態度において異なった反応の構えが反映しているということが明らかとなった。

第4章 調査2 熟達度別にみた発話の適切性についての中学生の認識

調査1では言語機能のみを提示してその脈絡的適切性を判断する力を調査したが、調査2では社会の中での役割関係や場面によって適切な発話を選択する力に焦点をあて、実際の発話例を示して適切性の判断テストを行った。また中学生の英語の熟達度と語用論能力の発達に関連を調査するため中学3年生150名を熟達度別に2群に分けた。資料とした機能連鎖は、アメリカで使用されている教科書Ginn(1996)から取り出した5種類の機能連鎖である。被調査者の英語の熟達度(被験者間、2水準)を独立変数、5種類の機能連鎖のそれぞれの判断得点を従属変数として1要因多変量分散分析を行った。その結果、好みに関する機能連鎖と断言することに関する機能連鎖においては、英語の熟達度の上位群の方が下位群よりも機能連鎖における適切性を判断する力が有意に高かった。これらは、英語の熟達度が上がると適切性の判断も容易になる種類の機能連鎖であると推察された。

第5章 調査3分析1 発話の適切性についての中学生、大学生、英語母語話者の認識

調査3分析1では、被調査者を留学経験のない中学2年生94名、留学経験のない英語専攻ではない大学3年生51名、4か月以上の留学経験のある英語専攻の大学3年生35名、英語母語話者であるアメリカの大学生41名、と4群に拡大し、英語の機能連鎖にみる適切性の習得プロセスはどのように展開していくのかを横断的に探ることを目的とした。資料とした機能連鎖は調査2と同様の5種類の機能連鎖である。文字情報とともにCDによる音声情報も刺激として用いた。分析方法としては、被調査者の英語の熟達度(被験者間、4水準)と機能連鎖の種類(被験者内、5水準)を独立変数、適切性に対する被調査者の判断得点を従属変数として2要因分散分析を行った。平均値や標準偏差が異なる5つの変数(種類の異なる機能連鎖の判断得点)を相対的に比較するために標準得点を用いて分析した。その結果、適切性を判断する力が英語の習得が進むにつれどの段階で伸び、どの段階では留まるのかについては機能連鎖の種類によって異なることがわかった。

第6章 調査3分析2 英語の機能連鎖の習得に関する質的分析

調査3分析2では、分析1で得られたデータをもとに、各被調査者群の個々のテスト項目(個々の対話)に対する適切性の判断を詳細に分析することとした。そのため、分析2では個々のテスト項目の得点をもとに1要因分散分析を行った。独立変数は被調査者の英語の熟達度(被験者間、4水準)、従属変数は適切性に対する被調査者の判断得点である。英語の熟達度により判断得点に有意差が認められた項目に関してチューキーのHSD検定により各被調査者群の平均値の多重比較を行った。そして、日本人英語学習者の各群が英語母語話者よりも判断得点が有意に低かった項目や逆に高かった項目を、機能連鎖の種類、話者の人間関係、適切なせりふか不適切なせりふかといった観点から分類してマトリクス(表)にまとめた。こうして量的分析と相補的に質的分析を行い、データの中に見えるパターンや特徴を取り出すことにより、日本人英語学習者の適切性の習得の道筋を探った。

第7章 結論と研究上の課題

本研究は、日本人英語学習者の適切性判断と機能連鎖間の構造や英語の熟達度との関連を調査し、適切な言語使用とその習得プロセスに関する基礎的情報を得ることを試みるものであった。

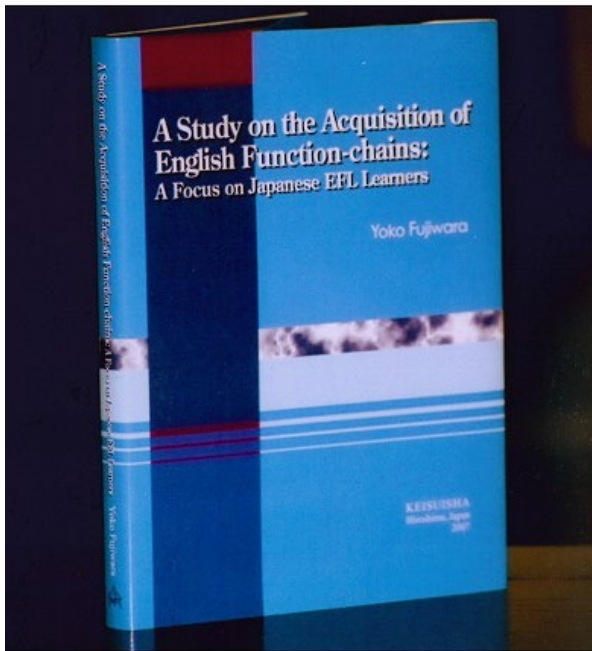
得られた調査結果は、教育的に次の4点において参考資料となる可能性が考えられる。

1) 文法・構造の学習がある程度進んだところで機能面からのまとめを行う際の機能の取り上げ方やまとめ方 2) 適切性の習得プロセスの展開を視野に入れた長期的な見通しを持った授業設計 3) 機能連鎖を教材として取り上げる際の配列順序 4) 異文化理解場面での価値観や考え方の意識を広げるような教材の編纂やタスクの開発

今後の課題としては次の4点を指摘した。1) 因子分析で取り出された因子や林の数量化Ⅲを適用して求めた相関軸に関連がある項目を積極的に取り上げ再調査を行い、因子や軸の解釈を確認する必要性 2) より多くの英語母語話者のデータを収集して適切性判断テストを再度行い、今回の調査結果と照らし合わせてみることの必要性 3) 英語母語話者への聞き取り調査等の蓄積や国語教育あるいは日本語教育の分野との連携 4) 理解と表現を対照とした総合的な日本人英語学習者の語用論能力習得メカニズム研究

3. おわりに

専門知識に裏付けられた中身の濃い授業をしたいという思いで教育実践と学究の二重生活を過ごしてきた。平日は中学校に勤務しながら、週末に新幹線と列車を乗り継ぎ片道3時間かけて東広島市にある広島大学まで通い、単位を修得した。統計学の手法でデータを解析しながら緻密な研究を積み重ね、担当教授と電子メールでやりとりしながら論文を仕上げた。こうした研究生生活を支えていただいた多くの方々に心から感謝している。生徒一人ひとりを大切にしたい良い授業をすることで恩返しをしていきたい。学期末の授業評価アンケートにおいて、「先生はすごくわかりやすい丁寧な授業をしてくれた。字も見やすかったし、覚えやすかったです。」「これからも先生とやっていきたい。」「先生が教えてくれるときみんな明るく楽しく笑顔で授業ができてすごくよかったです。」「満足している。パーフェクトです。授業の満足度∞。」「先生の授業は小道具を使っているのが楽しい（絵とか人形とか）。」「質問があったら必ず調べてきてくれる先生もとてもよいです。」「とても英語に自信がついて、英語がとても楽しくて、授業が楽しみです。これからはしっかりと全力で英語をがんばっていこうと思います。」といった英語の授業に対する生徒の感想を読み、とても幸せに思った。これからも、研究を継続し、理論と実践の橋渡しの役割を果たすような具体的な指導法を確立していきたい。



【注】

- 1 Fujiwara, Y. (2007). *A study on the acquisition of English function-chains: A focus on Japanese EFL learners*. Hiroshima: Keisuishsha.
- 2 本稿は、以下に報告させていただいた内容に基づいたものである。
藤原陽子. (2008). 「学位（博士）論文の報告」『山口県中学校教育研究会英語部会研究集録』第26集, 74-77.

(山口市立鴻南中学校)